



市読書感想文コンクール 市長賞受賞作品紹介

毎年開催している市読書感想文コンクールは、今年で49回目を迎えました。市内の小・中・高等学校から寄せられた113編のうち、本号では市長賞を受賞した作品を紹介します。



益田市読書感想文コンクール表彰式

★小学校中学年の部

いろいろなしゅんかん



吉田小学校 3年
大畑 歩久翔 さん

どんな図かんなのかな。しゅんかん図かんなんて今まで聞いたことがない。わくわくして本を開いてみた。

「なんだ、これ。」ぼくは思わず声を出した。ガラスのお皿、きれいなネックレス、にんじやのまきもの、おぼけくちびるなどの写真があった。ますますふしぎな気持ちで次のページをめくると、シヤボン玉をゆびでわろうとしている写真だ。ぼくもよくやっていた。次のしゅんかん、シヤボン玉に指がふれた所からじゅんにちぢんでいるようすが写真でせつめいされている。まるでクラゲのようだ。こんなシヤボン玉見たことないし、目ではぜったい見ることはできない。ハイスピードカメラで一秒間に二百枚から一万枚ぐらいとるとこんなしゅんかんがとれるそうだ。すごいなあ。人間の目では見られないしゅんかんがとれるなんて。どんなはやさで写真をとっているのかぼくにはそうぞうできない。

次はなんだろう。きれいなビーズ玉。実はシャワーの水だ。ぼくはおふるに入

るたびにどうしてもビーズ玉を見たくて、シャワーの水を強くしたり、弱くしたり、目を近づけたりしてみた。どれだけやってみても、やっぱり見えない。

とてもきれいなしゅんかん写真があった。ミルククラウンだ。牛乳のしずくがはねるとこんなきれいな王かんの形になるなんて、とてもしんじられない。水入り風船をはりてわった時のしゅんかんに、思わずわらってしまった。まるで大きなおぼけのくちびるだ。にんじやのまきものに見えるのは、空気のみだれでかとりせんこうのけむりに波が生まれて、うずをまいてできたんだ。自然ってふしぎだ。

写真家の伊知地さんは、しゅんかんしゅんかん自然の仕組みをぼくに見せてくれて、全くちやう世界があらわれることを教えてくれた。ぼくはわくわく、どきどきするいろいろなしゅんかんに出会った。そして、読み終わった時しゅんかんという言葉が頭にのこった。今までしゅんかんなんて考えたことなかった。いつしゅんかんのことで、とても短い時間のことだ。いろいろなものにしゅんかんがあるように、人にもしゅんかんがあると思う。楽しいしゅんかん、うれしいしゅんかん、かなしいしゅんかん。見ることでできないしゅんかんもたくさんあるかもしれない。

ぼくのしゅんかんはなんだろう。大きな野球を見ている時はどきどきするしゅんかん。わくわくするしゅんかんはど

んな時だろう。メロンを今から食べるぞというしゅんかんだ。そう思ったら、もつとしゅんかんを見つけたようになってきた。どきどき、わくわくするしゅんかんをたくさん作っていきたい。ぼくのしゅんかんを友だちに教えたらどうなるかな。伊知地さんがぼくに「しゅんかん」について教えてくれてぼくの世界が広がった。きつとその友だちの世界がぼくの世界みたいに広がっていくだろうな。

※読んだ本

「そうだったのか！しゅんかん図鑑」

伊知地 国夫（小学館）

★小学校高学年の部

「生きる」とは



吉田小学校 5年
田島 翔生 さん

生きるとはどういうことだろうか。これまで、あまり深く考えたことはなかったが、この本に出会い、「生きること」について考えさせられ、おしえられた。

もし今、母から「がんになった」と聞かされたら、ぼくはどうなるだろうか。がんという言葉には、死というイメージ

がある。だから、「母が死んでしまうかもしれない」と考え、落ちこんでしまうだろう。そして、毎日悲しんで泣き続け、大らかな神楽や合唱もやりたくなくなってしまうと思う。

はなちゃんの家族はどうだっただろうか。はなちゃんもお母さんもお父さんもつらく悲しい気持ちでいっぱいだったはずなのに、明るく前向きに生活していた。歌をうたって、みんなを笑わせるお母さん。お母さんのためにピアノをひいて楽しませるのはなちゃん。そんな姿から、はなちゃんの家族はお互いを大切に思う心が強いと感じた。はなちゃんが笑顔だとお母さんも笑顔になれる。お母さんが笑顔だとはなちゃんも笑顔になれる。力を合わせて支え合う愛いっぱい家族だと感じた。

また、食事の大切さについても考えさせられた。はなちゃんのお母さんは、まだ五才のはなちゃんにみそ汁の作り方を教えていた。バランスのよい食事をするだけでがんが小さくなったという話を聞いたことがある。食べ物だけが小さくなるなんておどろきだ。「食べ物で、体はできている」という言葉を母から聞いたことはあったが、あまり本気でその言葉について考えたことはなかった。はなちゃんのお母さんは、食べ物の大切さをよくわかっていたのだと思う。だから、自分がいなくてもはなちゃんが食事をきちんととって元気に生きていけるようにと願い、食事の作り方を

教えていたのだろう。はなちゃんのこれから考えた、お母さんの愛情なのだと思う。

ぼくも小さいときから母が、子どもでも男でも自分で生きていけるようにとごはんとみそ汁作りを教えてくれた。最近では、ご飯や野菜切りはするけれど、みそ汁は作っていなかった。これからは、みそ汁も作り、家族に「おいしい」と言って食べてもらいたい、家族を笑顔にしたいと改めて思った。

がんと聞いて、死というイメージがなくなるわけではないけれど、はなちゃんの家族のように前向きに過ごすことがお互いの生きる力になるということを知った。そして、人は支え合って生きていくのだということも教えられた。病気でつらい時だけでなく、悔しいことや悲しいことがあった時も前向きになれる行動をしていくことが大切だと思う。ぼくが大らかな神楽や合唱を楽しんでいる姿を見せることで、だれかが元気になるしてくれるといいなと思う。

生きることは食べる。食することは笑顔になる。笑顔になることは前向きになる。前向きになることは生きること。この言葉を大切に、前向きに生きていきたい。

※読んだ本

「絵本 はなちゃんのみそ汁」

安武 信吾・千恵・はな（講談社）

★中学校の部 今しかできないこと



横田中学校 3年
中沢 花菜 さん

私は、この物語の主人公と同じで吹奏楽部に入っている。「吹奏楽」ということと、作者の名字が私の名字と同じという共通点にひかれて、この本を読み始めた。

学校にいる時間はなるべく短くしたい。それが克久の方針だった。何も考えないこと。何も感じないこと。それが小学校でいじめられていた克久の方針だった。最初に克久という人物を想像したとき、克久やそのまわりの世界はモノクマのように暗いと思った。しかし、克久の世界は、吹奏楽部に入ったことで徐々に変化し始める。

克久の担当する楽器は、パーカッションになった。私も、吹奏楽部でずっとパーカッションを担当していた。だから、克久がパーカッションになったことはとても驚いたし、嬉しかった。パーカッションは、他の楽器よりも人気がない。基礎練習は目から見たら、退屈な練習に見える。でも、克久はそんな練習が

好きだった。音の粒がそろるのは気持ち良く、身体の血の巡りがよくなるようになっていた。克久はそんな風にどんどんパーカッションや吹奏楽にのめり込んでいく。私もパーカッションをたたくのが、好きだった。だから、克久がパーカッションを好きになってくれたのが、すごくうれしかった。

私は、この物語を読んで心に残った言葉がある。

「負け惜しみと思われてもいいけど、もうこれからは、絶対にこういう音は作れないと俺は思うんだ。うまい演奏とか深い演奏はこれからもできるけど、こんな真剣な音はきつとこれが最後だ」と有木が県大会の後に言ったこの言葉を読んで、今年の県大会の後、父に「みんなの音が入っているのがすごく伝わってきた」と言われたことを思い出した。なぜ見えるはずもないものが父に伝わったのか。それは本番、部員全員がゴールド金賞を目標に、音の一言一音を魂を込めて演奏していたからだろう。それは、有木の言う「真剣な音」と一緒なのかもしれない。

今年、私たちの演奏は「銀賞」だった。最初は「銀賞」と聞いてとても悔しかった。涙が止まらなかった。悔しくて、悔しくてたまらないのに、なぜか心はスッキリして演奏に悔いは残っていなかった。それはきつと、本番、みんなでする最後の演奏で、心が一つになって「真剣な音」をつくりだすことができた

からだだろうと、この言葉を読んで思った。

私がこの本を読み終えて驚いたことがある。それは、物語の初めの頃の克久と終わりの頃の克久がまるで別人のようになってしまうことだ。物語の中に克久の心の中が大きく変わる出来事があったわけではない。ただ吹奏楽にのめり込んでいくうちに、いつのまにか大きく成長していったのだ。しかし、克久とは逆に、いつも克久を馬鹿にしていた相田は、クラスの地位争いに負け、どんどん気弱になっていく。でも、もしかしたら克久も相田と同じようになっていたかもしれない。しかし、そうならなかったのは、克久は、熱中できるものを見つけたからだろう。何か熱中できるものがあるだけで、ここまで変わることができるのか。私は、時の流れの中で変化していく二人の様子を読んで、そう気づいた。何かに一生涯懸命になることはいいことだ。この本を読んで心からそう思った。何かに一生懸命になると、自分を成長させ、強くすることができる。そして、それは人を感動させることができる。克久が、普門館で聞いた「ブラボォー！ブラボォー」の声は、この夏、克久たちが毎日毎日練習を重ね、計りしれないほど努力してきたから聞いたのである。そして普門館で奏でた克久たちの音はどんなプロの奏者でもつくることのできない特別な音なのだと思う。そんな音は決して簡単には作れないし、たくさんの苦

労があつたと思う。早い時の中で、壁に立ち向かいながら過ごすことで、今までにはなかった強さをもつことができたのだと思う。私も三年間吹奏楽に打ち込む中で、本当に大変なことがいっぱいあった。仲間と意見が合わない。とか、自分の技術を周りと比べてしまつて不安になったり泣いてしまつてもたたくさんあつた。しかし、大変なことがあつたからこそ仲間意識を持てたり、いろんな人を受け入れることができるようになった。技術だけでなく、自分を成長させることができたのだと思う。努力することとは簡単なことじゃなく、大変なことがたくさんある。でも、それを乗り越えたと達成感があり、今までにない幸せを感じることができると、この本を読んで改めて感じた。

私は今年受験生だ。受験のことでの先回り、苦しむこともたくさんあるだろう。でも、もし苦しいことがあつても、時間の波に流されないように、踏ん張つて乗り越えていこうと思う。そして、今しかできないことを全力でやっ

※読んだ本「楽隊のうさぎ」
中沢 けい (新潮社)

★高等学校の部

前を向いて生きる



益田高等学校 2年

天野 希咲 さん

払拭できないものとの格闘。心の奥底にある闇。逃れられない現実。この本を読みながら、ずっと私の心の中には何かモヤモヤするような感覚があり、何とも言えない、とても複雑な気持ちになった。

この本の主人公の梨乃は、小学六年の時に宮城で大地震に遭った。津波で家のだめになったので、避難所、仮設住宅へと移り住み、父親の転勤がきっかけで、中学生の時に埼玉県に引っ越した。埼玉の中学校への転校理由は、できれば父親の転勤ということだけにし、たとえ被災者であることが周囲に伝わったとしても梨乃は周囲の人に事実を淡々と受け入れてほしかったのに、クラスの生徒はすでに事情を知っており、みんなに同情された。

私はこの時、何故、と思った。梨乃を傷つけないための周囲の配慮であることは理解できるが、真っ先に考えなければならぬのは、実際にそこで学校生活

を送る梨乃の気持ちだ。人それぞれ、配慮の仕方は異なる上に、周りの人と、受け取る側とで、思いが必ずしも一致するとは限らない。梨乃が被災者だと知る者は、そのことをクラスの生徒に伝えるかどうか、予め、梨乃本人に確認すべきであったと私は思う。そして、梨乃が被災者であることに気付いた者は、触れてもよいのかどうかを判断しかねる場合、触れるべきではないと私は思った。

自分が相手をどんなに応援したいと思つていても、同じ体験をした者でなければ、どんな言葉も、上辺だけの言葉になってしまふのではないだろうか。そうなれば、励ましの言葉ではなく、逆に傷つける言葉になってしまう。私が梨乃の立場だったら、触れてほしくないどころか、何も気付いていないふりをしてほしいと思つた。何も触れず、見守ることも、優しさだと私は感じる。

「震災で越してきたことを、誰も知らない学校に行きたい」という気持ちから、梨乃は東京の高校へ進学した。そして新しくできた気の合う友達と一緒に、念願の吹奏楽部に入部した。

私は、梨乃が今度こそ被災する前のような普通の生活に戻ることができたらいいなと心底思つた。もちろん、何もなかったことにはできないだろうが、学校で過ごす時間だけでも、辛い記憶と格闘するのではなく、距離を置くことができればと私は願つた。この本を読み進めていくうちに、梨乃が望んでいた、震災に

振り回されない生活が学校ではできてい
るように思え、私は安心した。

吹奏楽部で梨乃にはたくさんの仲間が
できた。その中に、津波と原発の影響で
福島海沿いから東京へ引越してきた
遼がいた。

遼が自己紹介の時に、自分が被災者で
あることを明るい口調で語ったところを
読んだ時、私は驚くと同時に、胸が痛く
なった。きつと心の中は、明るい口調と
は対照的はずだ。明るく振る舞えば振
る舞うほど、心の傷は深く、大きいに違
いない。

梨乃は遼にさえも、被災者であること
を最初は隠していたが、気付かれた。

この時私は、梨乃にとってはよかつた
のかもしれないと思った。というのは、
私は、男の子は女の子と基本的に考え方
が違うと思うことがあるからだ。男の
子に比べて女の子は、余計なことを考え
すぎて、答えを出すまでが回りくどい。
以前私が悩みを抱えた時に、男の子の意
見を聞いて、自分の悩みが取るに足らな
いことであつたと気付かされたことがあ
る。たくさんの人に出会い、色々な立場
の人の意見に耳を傾け、取捨選択をし、
自分の気持ちを切り替えることは大切だ
と思う。遼との気持ちの触れ合いによつ
て、鮮明に残っている震災の恐ろしい記
憶との格闘から共存へ、梨乃の心が変化
すればと私は思った。

私が梨乃の心の中に感じた闇は、梨乃
の兄が震災で亡くなったことが原因だと

読み進めていくうちに分かった。梨乃は
遼だけにこのことを話した。梨乃にとつ
て遼の存在が、心を開く第一歩になつた
のだと私は思った。

梨乃は吹奏楽部の一年の女子全員で寄
り道した時、被災者であることを自ら語
った。

私にはこの時、梨乃の心を照らす光が
見え、梨乃はもう大丈夫だと思えた。吹
奏楽部の仲間との出会いから、閉ざした
心の扉を自分で開くことができたのだ。
友情に、人生を変える大きな力が潜んで
いたことに私は感動した。本当によかつ
たとしみじみ思った。

そして、私の心の中にあつたモヤモヤ
した感覚は、まるで目の前の霧がパッと
晴れたように無くなった。梨乃は心を開
いて前を向くべきだと私は思いながら
も、私にはできないという気持ち、モ
ヤモヤ感の原因だつた。

誰の人生にも、いつ何が起るかわか
らない。大切なことは、たとえ大変なこ
とが突然起こつたとしても、現実とどう
向き合うかだと思う。人との出会いを大
切にして色々なことを学びながら、どん
な時でもしっかりと前を向いて強く生き
ていきたいと私は思った。

※読んだ本

「この川の水こうに君がいる」

濱野 京子（理論社）

無料

COOL
CHOICE

うちエコ診断してみませんか？

豪雨や頻繁な台風など、地球は大変な気候危機にあります。私たち一人ひとりが行動を起こす時です。

まずは、ご家庭のエネルギーをチェックしてみませんか？

日時：2月26日(水) 9:30～16:00 ※予約不要（所要時間20分程度）

場所：市役所本館1階 ロビー

*再生紙で作ったトイレトーパーなどのプレゼントを用意しています。

*右下のQRコードから、スマホ等で簡単に事前の入力ができます。（当日、手ぶらでの参加も大歓迎！）

3人以上集まれば出張診断もできます。お気軽にお問い合わせください。

【うちエコ診断の問い合わせ先】 特定非営利活動法人 コアラッチ ☎ 090-9704-6616（常國）

問 市環境衛生課 ☎ 31-0232



益田おやこ劇場

ともだちげきじょう

協働のまちづくり事業

「しろくまちゃん」は、セリフのない人形劇。

「ウレタンロボット・コップんこシアター・ぴょんちゃんけろちゃん」は、ワークの中から生まれた人形たちのお話。

「うどのうーやん」は、愉快で温かいお話。同名絵本をリズム感のある楽しい人形劇にしました！

日時：2月22日(土) 10:30～

場所：ますだ交流館（旧益田児童館）

チケット：一人200円（子ども大人同額、3歳以上はチケットが必要）

☆チケット販売・問い合わせ先☆

益田おやこ劇場 ☎ 090-8244-2208

協力：いなほ会、片山「めだか」の会、サロン「さくら」、りずむねっと

後援：益田市教育委員会、益田市社会福祉協議会

